

2021年9月25日

年間第26主日

菊地功大司教 メッセージ

民数記は、モーセ以外の70人の長老にも、聖霊の導きがあるときに限り預言を語る力を授けたことを記します。モーセにだけ与えられていた特権を奪われたという思いが、モーセに長年仕えるヨシュアにはあったのでしょうか。やめさせるべきだと進言するヨシュアに対して、モーセは、「主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になれば良いと切望しているのだ」と述べて、大切なのは、神の民すべてが与えられた役割を忠実に果たして、互いに支え合いながらともに共同体を育てていくことだと指摘します。

使徒ヤコブは、この世の富は、永遠のいのちを保証するものではないことを明確に指摘し、さらにはその富を蓄えるために犠牲となった多くの人の苦しみが、終わりの日には裁きとなって自分に返ってくることを指摘します。

マルコ福音は、神の国に入る者となるためには、中途半端ではなく、徹底的に福音に生きる者となる必要があることを、イエスが厳しい口調で語っている様子を記します。同時にイエスは、その厳しさは自分自身に向かう厳しさであって、他人を裁く厳しさではないことを明確にします。弟子たちは、自分たちの仲間でないものを裁こうとしますが、イエスは「わたしに逆らわない者は、わたしの味方」と述べ、弱い立場にいる人へのいつくしみに徹底的に生きることこそが、救いにとって第一に必要なことを示します。

9月最後の主日は、世界難民移住移動者の日であります。

レビ記19章34節に、こう記されています。「あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である」

教皇フランシスコは、今年の世界難民移住移動者の日にあたりメッセージを発表され、テーマを「さらに広がる“わたしたち”へと向かって」とされました。これは、「わたした

ち」という言葉を使うときにイメージする範囲を、自分の知り合いの者たちだけに限定するのではなく、さらにひろげて、困難に直面するすべての人を包括するようという呼びかけです。

同時に教皇は、それを単なる慈善のわざとは見なしていません。聖座の難民セクションの関係者によると、教皇はしばしば会話の中で、「わたしの家は、あなたの家だ」と述べると言います。それは単に、わたしの家に困窮する人を迎え入れよと言う慈善の勧めに留まるものではありません。「わたしの家」と言うことで、自分がその家における責任ある居住者であることを表明するように、迎え入れた人も同じように責任ある居住者となることを意味しているのだと言います。つまり援助の手を差し伸べた相手は、単なるゲストではないということでもあります。

教皇はメッセージで、「神が望まれたその“わたしたち”は、崩壊してばらばらになり、傷つき損なわれています」と指摘します。その上で教皇は、「内向きで攻撃的なナショナリズムや過激な個人主義は、世の中でも教会内でも、その“わたしたち”をばらばらにしたり分裂させたりします。そしてもっとも大きな犠牲を払わされるのは、すぐに“あの人たち”となりうる人たち、すなわち、外国人、移住者、疎外された人、つまり実存的な周縁部に住まう人たちです」と記し、「人類家族」を修復するようと呼びかけています。福音に徹底的に従おうとするわたしたちは、社会にあつて弱い立場にいる多くの人たちへのいつくしみに徹底的に生きる者でありたいと思います。